

# コロナ禍におけるカルチャーセンターの音楽講座の動向

## —声楽講座とピアノ講座の比較を中心に—

大人のピアノ研究会代表 三上香子  
声楽家 中野陽子

### はじめに

2019年秋に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下「コロナ」）は、世界的なパンデミックを引き起こした。そして日本では、国民に対し価値観の変換が望まれた。国が提案する「新しい生活様式」には、日常生活だけでなく、スポーツや音楽などの文化活動も含まれる。スポーツや音楽における感染対策では、会場の閉鎖や収容人数の制限、休業要請にともなう音楽教室の休講などの措置がとられ、文化活動に大きな影響を与えられた。

そこで筆者は、コロナ禍における音楽教室のあり方について検討することにした。具体的には、大阪府内の大型カルチャーセンター（以下「Aカルチャー」）の声楽講座とピアノ講座の受講生の動向から、今後の音楽講座の課題を探るものである。調査期間は、大阪府に第1次緊急事態宣言が発令された2020年4月上旬から、第3次緊急事態宣言解除直後の6月20日までの約1年2カ月間とした。Aカルチャー担当者へのアンケートは三上香子と中野陽子が実施し、本稿の3は中野、残りを三上が担当した。

### 1. 国の緊急事態宣言と大阪府とAカルチャーの対応

新型コロナウイルス感染者の増加に伴い、国は2020年4月、2021年1月、同年4月に3度の「緊急事態宣言」を発令した。主な宣言内容は、外出の制限、イベント開催の制限、施設の使用制限の要請である。これらの要請は、緊急事態宣言ごとに細かく設定され、再三にわたり変更が加えられた。また感染状況にともない、該当する都道府県が追加、削除されたり、宣言期間が延長されたりもした。このことから、コロナにより日本が激動している様子がうかがわれる。

大阪府は、すべての緊急事態宣言の対象地域となった。第1次宣言解除後は、「大阪モデル」を作成した。また第2次緊急事態宣言後は、まん延防止重点措置の対象地域として、外出、イベントの開催、施設の使用を中心に、府民に制限を要請している。

Aカルチャーは、緊急事態宣言にともなう施設の使用制限に従い、これまで2度の臨時休講を実施した。

下記の図表1は、国の緊急事態宣言と大阪府とAカルチャーの対応をまとめた表である。なお、Aカルチャーの欄には、臨時休講された期間を記載しているが、解除後にすべての講座が再開されたわけではない。このことは2章に記載する。

図表1 国の緊急事態宣言と大阪府とAカルチャーの対策

国	大阪府	Aカルチャー
第1次緊急事態宣言 2020/4/7～5/25	・第1次緊急事態措置 4/7～5/21 ・感染拡大防止に向けた取り組み 「大阪モデル」5/5～現在	臨時休講 3/2～5/22
第2次緊急事態宣言 2021/1/8～3/21	・第2次緊急事態措置 1/14～2/28 ・まん延防止重点措置 4/5～5/5	通常営業
第3次緊急事態宣言 4/25～6/20	・第3次緊急事態措置 4/25～6/20 ・まん延防止重点措置 6/21～7/11	臨時休講 4/25～5/31

## 2. コロナ禍におけるカルチャーセンター

この章は、Aカルチャーセンター担当者へのメールアンケート調査の結果をもとに記載する。

### (1)Aカルチャーセンターの概要

以前から、Aカルチャーは、他の大手カルチャーセンターと比較して「音楽と健康に強いカルチャー」と言われていた。そのため2015年8月には、111の音楽講座（邦楽24と洋楽87）と30の健康講座が開講され、これらは全講座の約2割を占めていた。音楽講座のなかでも最も人気が高いのは歌唱で、健康講座のなかでも最も人気が高いのはヨガである。

Aカルチャーは、受講料から講師料を支払う講師委託制で運営されている。講座のタイトル・講座内容・開催曜日・時間帯などは、講師とスタッフで協議し、受講生の募集活動・体験レッスンおよび見学者の予約受注・教室準備・備品の手配などはカルチャー側が行う。受講生の募集は年4回（1月・4月・7月・10月）実施され、募集方法は新聞折り込みと、ホームページへの掲載および各会場に設置されたリーフレットである。そのなかでも最も集客に効果的なのは、新聞折り込みである。情報化社会と言われる今日においても、ホームページからの問い合わせはあまり多くない特徴がある。

Aカルチャーの大部分は、60代以上の女性が占める。その理由として、運営母体がつづらねのイメージの影響しているのではないかと考えられる。さらに受講生の年齢層の高さが、健康講座の人気に繋がっているのではないかと推測できる。なお平成の大不況にも関わらず退会者にもあまり変動がなかったことから、Aカルチャーの受講生は、経済的動向に左右されにくい生活環境の人々であると推測される。

### (2)Aカルチャーの新型コロナ対策

2020年1月中旬、テレビで新型コロナウイルスの情報が報道されはじめた。そこでAカルチャーでは、「受付や各教室へのアルコール消毒液の設置」「ペーパータオルの設置」「受付の飛沫防止パーテーションの設置」を行い、「各教室のドアと窓の開放」と「手洗い、マスク着用などの注意喚起ポスター」を掲示しながら運営を続けた。しかし、コロナまん延に先駆けられた対策と第1次緊急事態宣言の発令による措置により、3月2日から5月22日までの約3カ月は、全講座に休講措置がとられた。

第1次緊急事態宣言解除後に、講座は順次開講された。早期に開講された講座は、マスク着用で距離がとれる講座に限定され、発声を伴う講座や飲食を伴う講座、身体接触のある講

座、人数の多い講座はすぐには開講されなかった。また、受講生からは「行きたくてもコロナが心配なので行けない」「家族に止められている」という声や、「感染予防対策について聞きたい」「受講生全員の体温を測るべきではないか」「講師が高齢なのに、開講するのはおかしいのではないか」という意見もあげられた。なお、Aカルチャーでは、講座再開に伴い、下記の感染対策が講じられた。

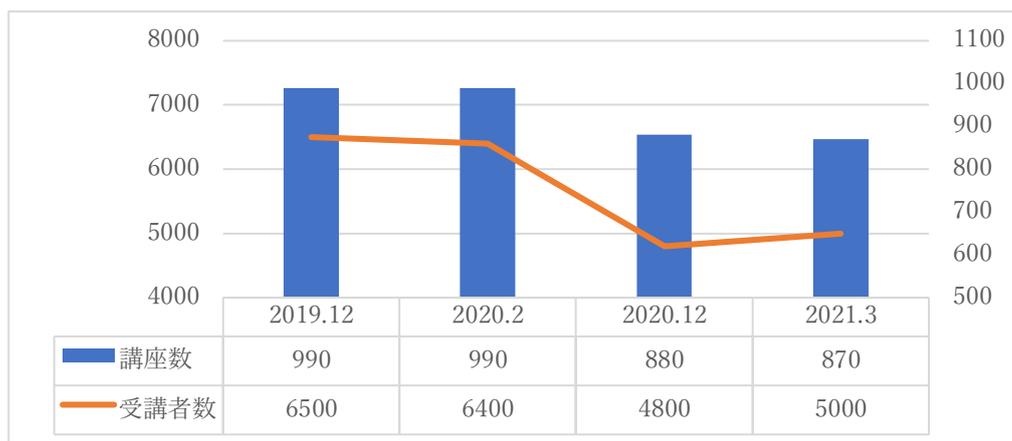
図表2 コロナ禍におけるAカルチャーセンターの取り組み

- ・受付と各教室に消毒液とペーパータオルを設置
- ・受付に飛沫感染防止パーテーションを設置
- ・各教室前に注意喚起のポスターを掲示
- ・講師への注意喚起文を配布（2020年5月、同年7月、2021年1月）
- ・各教室の座席を2分の1に減、スタジオは一人当たり4㎡を確保
- ・各教室の入り口と窓を開放
- ・窓のない教室には扇風機を設置
- ・各スタジオ、更衣室の入り口が開放できるように、暖簾を設置
- ・更衣室のシャワー室は使用不可に
- ・更衣室のロッカー数を減、脱衣カゴを導入
- ・脱衣カゴはスタッフがその都度アルコール消毒
- ・歌唱講座など希望の講座にはフェイスシールドを配布

### (3) 講座数と受講生数の変動と今後の取り組み

次の図表3は、2019年12月から2021年3月までのコロナ禍における講座数と受講生数の増減をあらわした表である。この表からは、Aカルチャーでは、2019年12月から2020年12月までの1年間に約1割の講座が休講になり、1700名が休会（退会）したことが示されている。しかし2021年3月には、さらに10講座が休講されたにもかかわらず受講生が増加している。これらの結果からAカルチャーでは、2021年4月に休講中の講座が再開されることに伴い、春の生徒募集による受講生のさらなる増加を予想していた。

図表3 コロナ禍におけるAカルチャーの講座数と受講生数の推移



ところが、4月25日からの第3次緊急事態宣言により、Aカルチャーは2度目の休講措置がとられた。緊急事態宣言下にもかかわらず、平日の講座は6月1日から再開された。しかし現時点ではまだ流動的であるため、講座数および受講者数は把握されていない。

さて、2021年3月にAカルチャーでは、コロナ禍における今後の取り組みとして、①感染予防対策をさらに徹底し、受講生が安心して受講できる環境を整えること、②オンライン講座の充実、③緊急事態宣言などの際に、受講生に迅速に連絡ができる体制を整えること、の3つを提案した。これらは、6月の再開以降も継続されている。

### 3. 声楽講座の動向

#### (1) コロナ禍以前の声楽講座

声楽講座は、グループや個人を対象に、発声法・呼吸法・歌唱法などの基礎を身につけ、楽しく歌いながら歌唱力の上達を目指す音楽講座である。Aカルチャーでは、90分のグループレッスンが5クラスと60分のグループレッスンが2クラスあり、それぞれ3名から7名が在席していた。他に30分の個人レッスンも開講している。受講生は、社会人で性別問わず、60代70代を中心に、20代から80代まで幅広い年齢層にわたる。

ここで歌われる曲は、日本歌曲・イタリア歌曲・ドイツリートやオペラアリア(歌劇の詠唱部分)をはじめとしたクラシックや、童謡・愛唱歌・世界名曲・ポピュラー・フォークソングなどであり、ジャンルは広範囲にわたる。なお、歌唱表現は身体や精神の働きと深く連動するため、声楽が心身に及ぼす健康効果も併せて伝授されている<sup>1)</sup>。

コロナ以前のグループレッスンでは、座席も接近し、自由にのびのびと発声して歌唱を楽しんでいた。声を合わせて音程やリズムを確認しあうことも多く、互いに楽譜の読み方や歌い方を教えあっていた。また音楽観や芸術性を深めあうため、雑談やお喋りといったコミュニケーションも盛んであった。個人レッスンは、一人での取り組みのため周囲への気遣いは無用で、朗々と歌声を響かせながら、声楽本来の歌唱のスキルに基くベルカント唱法やクラシック歌唱の体得に励んでいた。

#### (2) コロナ禍における声楽講座

##### a. コロナ第1波(2020年1月29日から6月13日<sup>2)</sup>)

講座の指導者である中野は、コロナ禍以前から、声楽家の経験をもととした「冬の喉と声」を守る方法を伝えていた。その内容は、風邪に罹患しないためのマスクの効能・のど飴で気管の潤いを保つ方法・風邪の罹患者との距離をとることの3点であった。コロナの初期には、これらを、感染予防と対策のためにも伝えていた。

大阪府内の感染者の増加にともない、Aカルチャーから、感染予防のためのフェイスシールドが配布された。他県で合唱団やカラオケやライブハウスにおいてクラスターが発生し、「発声」「大声」「エアロゾル<sup>3)</sup>」が感染要因であると解明された時期には、受講生たちも声楽と感染リスクの関連に危惧を抱き始めた。

やがてAカルチャーは3月から全面休講となり、4月発出の第一次緊急事態宣言は延長され、休講が長引いた。その間 中野は、レッスン動画をWeb上にあげたり自身のブログで練習

---

1) 中野陽子：声楽が及ぼす心身への健康効果 発達人間学論叢第20巻, 2016

2) 大阪府の新型コロナウイルスの分析による期間を示す

3) 気体中に液体ないしは固体の微粒子が広がった状態を指す

を呼びかけるなど、SNS を活用した学びの機会を提供した。受講生からは「早く歌いたい」「歌える日まで頑張りましょう」などの言葉が届いた。双方の音信は不通になることなく非接触の形で、わずかながらも休講中の双方のコミュニケーションは保たれていた。

b. コロナ第2波（6月14日から10月9日）

7月、発声を伴うため再開が遅れていた声楽講座がようやく開講された。受講生から再会の喜びの声があがる一方、声楽講座は、発声や歌唱を極力抑えた「小声」と、座学を主とする「無言」で進められた。Aカルチャーからは、フェイスシールドまたはマスクいずれかの配布があった。指導者である中野は、歌唱の感染リスクの高さから、受講者に対してマスクとフェイスシールドの併用をお願いした。

なお、再開当初は、受講生の大半が戻ってきた。しかしこれは、すでに納入した受講料の消化のためであり、今後のレッスンの継続とは別問題であることが推察された。結果的に受講生数はコロナ以前の半減に落ち着いた。残った半数は、不要不急の外出自粛生活にあっても、声楽講座が必要と位置付けた者であることが推察される。

真夏の8月には、陽性者は再び増加傾向に転じた。受講生は猛暑の中、換気のための窓の開放でクーラーが効きにくく、フェイスシールドとマスクの両方着用という過酷な学習環境であったが前向きにレッスンに取り組んだ。後に、フェイスシールドの着用が熱中症や酸欠をまねく恐れがあることに加え、陽性者が減少傾向に転じたことから、マスク以外の着用は受講者各自の判断にゆだねられることになった。

陽性者数の少なくなった秋ごろ、受講生の有志が「文化芸術リスタート応援企画」コンサート出演への意志を示した。この行政による企画は、コロナで中止や延期に追い込まれた芸術文化活動のための救済策であった。出演を果たした者からは、「舞台上で歌うことを生きる目的にして、辛い時が乗り切れた」「芸術の舞台で延期や中止が続くが出演するチャンスに巡り合えて幸せだ」「コロナで人と人との距離が遠くなったが、同じ目的をもつ人たちと触れ合っただけで元気もらった」など、平時以上にステージへの意義を強く感じた感想が多く寄せられた。

c. コロナ第3波（10月10日から2021年2月28日）

11月初冬に、コロナ陽性者が再び増加に転じた。しかし受講生は、感染予防対策を徹底して声楽のレッスンを継続した。声楽講座の独自の催しとして、小規模ながら音楽会を実施する機会が設けられた。厳しいコロナ禍の只中にもかかわらず、音楽会を楽しむ様子が見えられた。このころの受講生からは「口腔フレイルの予防のため<sup>4)</sup>」「肺炎や誤嚥性肺炎の予防」「気分転換のため」「教室に来て歌うことが運動に良い」などの発言が聞かれるようになった。これらの発言は、感染予防と対策を徹底した守りの歌唱から健康維持増進のための攻めの歌唱へ、受動的から能動的な声楽の活用へ、受講生の認識が転換期にきたことを意味するものではないかということが考えられる。

---

4) 「口腔フレイル（オーラルフレイル）」とは、嚥んだり、飲み込んだり、話したりするための口腔機能が衰えることを指す。

さらに、この時期に声楽講座への新入会があった。動機は「所属していた合唱団が無期限の活動停止となったため」「新しく何かにチャレンジしたかったから」などである。声楽講座は、コロナ禍で行き場を失った歌唱愛好者の受け皿としての役割をも担い始めた。

また、中野は、長期欠席する受講生からの要望を受け、パソコンやスマホを使ったリモートレッスンを試みた。これには声楽の遠隔レッスンの可能性が予測できたが、同時に機材等の問題点もあきらかになった。このことから声楽のリモートレッスンの活用については、さらに検討が必要であることが考えられる。

#### d. コロナ第4波（3月1日以降）

大阪の医療逼迫は厳しく、第2次緊急事態宣言下にあったが、声楽講座は引き続き開講していた。真冬の期間に欠席していた受講生が戻ったのは、3月の春先であった。長期欠席の理由は「家族に止められた」「陽性者数が下がるまで様子を見ていた」「春になるまで活動再開を待っていた」などである。このうちの一人は「外出自粛を厳しく自分に課して鬱に陥ったが、久しぶりに声楽講座に出席して心が晴れた」と感想を述べた。継続した受講生の一人は「コロナで何かを始めるのは難しいけれど、いつも来ていた教室があってよかった」と感想を述べた。これらの発言は、コロナ禍における声楽講座の担った役割が、学びの場だけでなく自宅以外の居場所となり、心身の不調を癒す場や社会とつながる窓口となり得ることを示唆するものである。

やがて第3次緊急事態宣言を受けてAカルチャーは休業に入り、休講は長期に及んだ。

#### e. 2021年6月1日から第3次緊急事態宣言解除まで

規制緩和によって6月1日からAカルチャーは再開された。緊急事態宣言下にあったがワクチン接種が始まった時期でもある。再開直後の受講生は、マスク着用で歌いながら久しぶりのコミュニケーションを楽しんで、ブランクはあったものの、コツとカンを短時間で取り戻していった。出席者数は依然として半減のままだが、反面ソーシャルディスタンスが確保できる利点もあり、のびのびと身体という楽器を使い、心を開放して歌う様子が見受けられた。

受講生からは「再開の連絡をもらって嬉しかった」「人の多いところは感染が心配だが、ここは感染対策万全なので安心だ」などの感想が届けられた。休講中に自主練習をしていた者、発声のスキルを役立てて短期の仕事に就いた者、大病を患いIGUに入った者など、個々に休講中のエピソードも語られた。なお、リモート講座に取り組んだ受講生からは、「平常時と変わらず練習できた」という発言が得られた。

#### (3) コロナ禍における声楽講座のまとめ

声楽の主体は「発声・呼吸・歌唱」であり感染リスクそのものでもあるため、指導者と受講者自身は常に、危ういバランスの上に立ってレッスンを続けた。コロナ禍の声楽講座の動向から抽出されるものは、感染リスクである「発声・呼吸・歌唱」をその時々状況によって捉えなおし、自身の身体健康と精神衛生へのメリットへと変化させ、ウィズコロナを乗り切る手立てへと深化させていった、受講者の声楽への認識の変遷である。一方、「コロナに負けました」という言葉に代表されるように、退会していった者の多いことも事実である。心

身にもたらす声楽効果の再認識、レッスン継続のモチベーションの維持、自らの生活と人生の核に声楽を位置付けるための導き、これらが、コロナ後に向かう声楽講座の課題であることが示唆された。

#### 4. ピアノ講座の動向

##### (1) コロナ禍以前のピアノ講座

内閣府によると、令和2年の65歳以上の高齢者人口は、総人口の28.7%と過去最高を更新した<sup>5</sup>。総務省の労働力調査では、65～69歳の就業率は48.4%と高水準をしめしている<sup>6</sup>。これらの数値は、日本の超高齢化社会と、厚生労働省が定義した「健康寿命」の延伸を裏づけるものであると思われる<sup>7</sup>。それを裏付けるように、これまで子どもの習い事とされてきたピアノ教室にも高齢者が増加してきた。

2021年6月現在、Aカルチャーのピアノ講座は、グループと個人レッスン講座が開講されている。グループレッスンは、60代以上のシニアを対象にした60分間の「脳の活性化を目的とするコース」と、「演奏を中心としたコース」が開講されている。他方、30分の個人レッスンは、受講生が練習したい楽曲を中心にした指導が行われ、40代以上の受講生が在席する。その他、ピアノ初心者を対象にした楽典講座や、3か月間の早朝グループレッスンコースも開講している。

##### (2) コロナ禍におけるピアノ講座

ピアノ講座では感染対策として、Aカルチャーに対し、ピアノ鍵盤の専用除菌剤「キークリーン」とキーボードを清拭するための「除菌用ウェットティッシュの設置」を依頼した。受講生には、入室時の手指の消毒と、演奏時のマスクの着用を徹底した。また、季節に関わらず、窓は開放した状態で開講されている。下記の図表4は、2020年1月から2021年5月までの、ピアノ講座の受講生数の流れをグラフにしたものである。

---

5) 内閣府「令和2年高齢化の状況」<[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2020/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2020/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf)>2021年6月12日最終検索。

6) 総務省「令和2年10月～12月平均の労働力」<<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/4hanki/dt/pdf/gaiyou.pdf>>2021年6月12日最終検索。

7) 厚生労働省「健康寿命2020」<<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10601000-Daijinkanboukouseikagakuka-Kouseikagakuka/sinntyoku.pdf>>2021年6月12日最終検索。

図表4 Aカルチャーのピアノ講座の受講生数の推移



第1次緊急事態宣言における休講措置解除の直後に受講生の増減はみられなかったが、翌々月には受講生数が大幅に減少した。これは「講座再開後の受講生の出席は、すでに納入した受講料を消化するためだけのものである」とする中野の判断を裏付けるものである。しかしその後は、コロナ禍にもかかわらず受講生数は急激に増加し、秋にはコロナ以前の数を上回った。さらに、第2次緊急事態宣言により若干の減少がみられたものの受講生数は徐々に増加し、第3次緊急事態宣言の休講措置解除後も、人数の減少はみられなかった。それどころか、新入会や体験レッスンの問い合わせが相次いでいる。

コロナ禍における受講生の発言や様子では、休講措置解除のさいには再開を喜ぶ声とともに、ピアノの練習量や進度に関する声が多くみられた。例えば「みんなに負けないように休みの間にたくさん練習した」「時間があつたのでこれまで練習した曲を復習した」「写譜（楽譜を書き写すこと）をしてみた」などである。このことから、ピアノ講座の受講生は、休講期間を有効に活用し、意欲的にピアノ学習を継続していたと考えられた。

### (3) コロナ禍におけるピアノ講座のまとめ

コロナ禍における受講生の急激な増加については、これまでとは異なる学習動機が推測される。例えば、CASIOが2020年に実施した調査によると<sup>8</sup>、この1年以内に楽器をはじめた人の5割が、テレビの見過ぎを楽器演奏で解消できたと回答している。また、山野楽器のデータによると<sup>9</sup>、2020年度の電子ピアノとキーボードの販売数は、前年比の130%を超える。山野楽器はその理由を、「ヘッドホンで近所に気兼ねなく練習できること（電子ピアノ）」「コンパクトで場所をとらないこと（キーボード）」としている。このことから、コロナ禍には「ピアノを弾いてみたかった」「家にピアノがあったから」「ボケ防止」のような従来の学習

8) カシオ株式会社が実施した市場調査。期間：2020年7月30日～7月31日、調査対象者：楽器演奏を過去1年で新しく始めた、または1年以上のブランクを経て再開した15～69歳の男女1,030人。

9) 山野楽器「2020年度売れた楽器TOP10」<https://kyodonewsprwire.jp/release/202103152269> 最終検索 2021.6.11。

動機に加え、「自粛時間中の息抜きや退屈しのぎのために、個人練習が可能な楽器学習を選択した」という、新しい学習動機がみられたと考えてよいであろう。

なお、息抜きや退屈しのぎでピアノ学習を開始する例は、これまでもみられた<sup>10</sup>。しかしそれらはすべて個人による余暇活動であった。ところが自粛要請は、国から強制された余暇である。コロナ終息後もかれらがピアノ学習を継続するかどうかは定かではない。それを裏付けるように、「家にいても暇だから」と話す体験レッスンの受講者が増加している。もちろんかれらの学習動機が暇つぶしだけだとは考えられない。また暇つぶしだとしてもピアノ学習を選択した事実には、他の理由が考えられる。しかし、コロナ禍に入会した受講生には、従来とは異なる学習支援の必要性があることはあきらかである。

## 5. 声楽講座とピアノ講座の共通点と相違点

度重なる大阪府の緊急事態宣言とAカルチャーの休講措置に準じ、声楽講座とピアノ講座はそれぞれの感染対策を講じながら運営されてきた。受講生は、コロナ感染への不安を口にしながらも、健康のためや学習課題を達成するために、音楽学習を継続している。

なお、1度目の休業再開後は両講座ともに受講生数が減少した。とくに発声を伴う声楽講座では、大幅な減少がみられた。しかし既存の受講生は、広くなった会場でむしろのびのびと声楽を楽しむ様子がかがわれた。ワクチンが普及しコロナが終息に向かうにつれて、声楽学習を再開する者が増加することが予想される。

他方、ピアノ講座では、自粛時間の補填としてピアノ学習を希望する受講生増加した。前述したように、かれらは、コロナの終息とともに退会することが予想される。このことから今後の声楽講座とピアノ講座では、相反する受講生数の変化が推測される。

## 6. その他の音楽講座の動向

声楽と同様に発声を伴う音楽講座のうち、2020年春に開講を予定していた「ポピュラーソング講座」は、休講措置で体験レッスンが開催されなかったため開講未定になった。2021年6月現在も、開講の見通しは立っていない。「音読講座」は受講生の退会により、2020年前半は閉講された。しかし秋になりコロナが落ちつくと思われ受講希望者が集まった。「朗読講座」は、講師と受講生が相談の上、2020年3月から2021年春までの1年間を自主休講とした。

発声を伴わない音楽講座のうち「大正琴講座」では、とくに受講生の大きな変動は見られなかった。しかし指導者からは、「新入会者が数回のレッスンで辞めてしまうことが多い。軽い気持ちで習いに来る人が増えたからではないか」と、これまでの新規入会者との違いを述べた。

最後に「ジャズ講座」の例を記載する。この講座は発声を伴うが、休講措置後もとくに受講生の増減はみられなかった。その理由は、2013年からスカイプを使った遠隔レッスンを実施していたからではないかと講師は述べた。これまでスカイプのレッスンは定期的に無料で

---

10) 三上香子・堀薫夫(大阪教育大学)「アンドラゴジーの視点からみた成人のピアノ教育における学習指導に関する研究」音楽学習学会、第10巻、2014年、49-60

行われ、その後ズームにかわり、休講期間中も継続されていた。なお第1回非常事態宣言のさいに「次回Aカルチャーが休講になれば、リモートでレッスンを継続する」と受講生に伝えていた。そのため、2度目の休講措置の間も、ジャズ講座はリモートレッスンで継続されている。

## 7. コロナ禍におけるAカルチャーの音楽講座のまとめ

Aカルチャーでは、第3次緊急事態宣言の一部緩和により、2021年6月1日から平日の講座が再開された。声楽講座とピアノ講座も、コロナの感染予防をしながら運営されている。しかし、開講が未定となった講座や未だに再開されていない講座も存在している。学習の機会が得られない状態では、受講生のモチベーションの低下が懸念される。そこで、声楽講座や前述した成功例のひとつであるジャズ講座にみられるような「リモートレッスンの活用」が望ましいと考えられる。しかし、受講生の多くが高齢者であることや、講師側がリモートレッスンに不慣れであるという多くの問題点もある。これらを含め、Aカルチャーは、リモート講座の開講について、講師や受講生に対して、より積極的に検討すべきであろう。さらに音楽講師は、徹底した感染予防対策を行い、リアルとリモートを使い分けながら楽しめる音楽活動の提案をしていくことが望まれる。

## おわりに

2021年6月現在、大阪では緊急事態宣言の解除後のまん延措置について話し合われている。また、65歳以下のワクチン接種の受付も開始された。しかし、コロナ終息の見通しは立っていない。

コロナ禍において、高齢者の生涯学習を担ってきたカルチャーセンターは、不要不急の場として真っ先に自粛の対象になった。しかし調査報告に散見されるように、受講生が必要とする場でもあった。なお、NPO法人「音の風」の滋野浩毅理事は、2020年度の年次報告書の冒頭で「人が集い、音楽を通して社会を幸せにすることを目指す私たち音の風にとって、今はとても辛い時だ。しかし、大学の休講中にニュートンが万有引力を発見した例もある。今は、我々が音楽で社会に対して何ができるかを考え、次のアクションに備えるべき時期だ」と記している。このくだりは、多くの音楽関係者に伝えたい一節である。